

## 幼少の日々

真生幼稚園の北側の園舎の建っているところはかつては畑でした。そこは父母にとっては日々の食事

に欠かせない野菜を作る大切な場所でしたが、子どもの私にとっては遊びの場所であり手伝いをさせられる場所でもありました。

いろいろ思い出はありますが、ここでは一つだけ書いておきましょう。それはいつの頃からか母に肥桶おけをかつぐ手伝いをさせられるようになったことです。当時畑の主な肥料といえば人糞でした。便所は汲み取り式。便所という言葉も今ではすっかり聞かなくなりましたし、汲み取り式といってもどれだけの人に通じるか。まあここで便所談義を始めると長くなりそうなので、くわしい説明はやめますが、とにかく便所から大きな柄杓ひしやくで桶に糞尿を入れ、天秤棒で肩に担かいで畑まで運ぶのは農作業の必須の仕事でした（柄杓も天秤棒もそれを表す佐賀弁があつたはずですが思い出せません）。父は肥桶二個を天秤棒の前後につり下げて運んでいましたが、母と私は肥桶一個を真ん中に吊り下げ、私が前、母が後を担いで、途中細いあぜ道を通りながら畑まで運びました。当時は遊んでいる最中にこの手伝いに呼ばれるのは嬉しいことではなく渋々やっていました。とにかく中身をこぼさないように注意しながら運んだ母との共同労働は強く印象に残っています。この手伝いを何年間やったのか定かではありませんが、この仕事が終わったのは、畑を幼稚園敷地に変える造成工事が始まってからで、私が小学校4年生の頃だつたと思います。

私が幼児の頃はまだ真生幼稚園はなく、西峯院の佐賀保育園に通いました。でも当時の記憶は極めて断片的で先生の顔も名前も思い出せません。当時は送迎の習慣もなく、国鉄（今のJR）長崎線の踏切を渡って往復一人で時には友だちと歩いて通ったと思います。幼児の足で三十分以上はかかったでしょう。自動車の往来もほとんどなく交通事故の心配もありませんでした。私が卒園する頃堀江保育園ができたので、弟（現園長）はそちらに通うことになりました。

今は住宅地になっている園の周囲にはほとんど家はなく、稲穂の波をへだててはるか彼方まで見通せるところでした。今は溝のようにになっている園の周囲も泳いだり、魚やトンボが釣れる小川でした。トンボを釣る？ 通常のトンボは静かに近づいて直接手で捕るのが普通でしたが、ヤモと呼んでいたオニヤンマの場合は、雌の胴体を糸で結び、もう一方の端を小さな棒にくくりつけて川岸で「ヤモ、ほい」と言いながら棒をゆっくり振り回していると、雄のヤンマが近づいてきて二匹のヤンマが一体となります。そこで糸をたぐり寄せて雄のヤンマを捕まえるわけです。雌で雄を釣る、そんなことの意味を考えすることもなく、捕まえたときの手応えに満足感を味わっていました。当時は堀と呼んでいたこの小川はコンクリートの護岸はなく、佐賀平野の特色であるクリークの一部だと知ったのは後になってからです。園の東側の堀は今より広くて当時「あびんぼい」と呼んでいました。多分「浴びる堀」つまり水浴びす

る堀という意味ではなかったかなと後になって思い至りました。

現在では幼児期における自然とのふれあいとか、歩くことの重要性が言われるようになっていますが、当時は生活自体がそのようなものでした。というより、子ども自身が自然の一部であったといった方がいいかもしれません。そのような昔にノスタルジアを感じるのは現在失われたものがあるからでしょう。でも、それは事柄の一面です。そのような環境で育った人々が生活の中で不便を感じることもあるから、

より便利な生活を求めているいろいろ工夫してきました。そしてその努力が現在の生活環境を造り出す原動力になったのですが、他方自然環境の破壊もひきおこすに至っているのもまた否定できないのです。自然環境の破壊が人類の生存さえ脅かすに至っている現在、自然環境との調和を担う人々の存在が望まれていると思いますが、そのような人々を育てる上で幼児教育も大切な役割を持っている気がします。

ある目的のために子どもを育てることについてはいろいろ議論があるところでしょう。かつては子どもを家業の後継者に育てるという目的は多くの親が持っていました。今はそのようなことを考える人はほとんどいないでしょう。そのような条件が存在しなくなりましたから。子どもには子どもの独自の

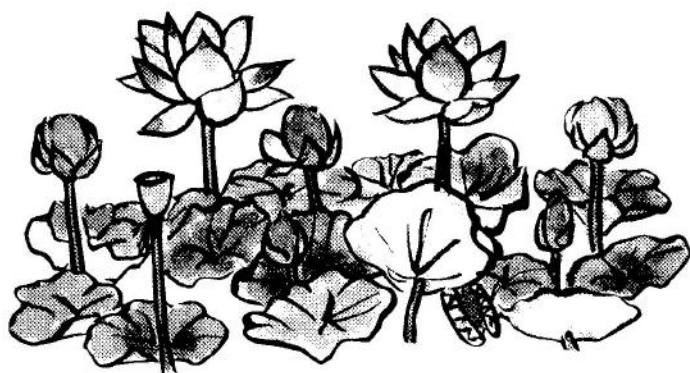


世界があり、それを守ってあげるのが大人の任務であるというのも大切な考え方のような気がします。

ただ、どのような子ども観を持つにしても、将来子どもたちが戦争に巻き込まれるような日本にしない、これは大人の責任です。かつては喫緊のこととして書くようなことでもなかったこのことを、これを書いている今、強く感じています。

保育の現場も知らず、研究しているわけでもない私は、園長に乞われるままにこんな個人的な思いを書いてしまいました。

(二〇一五年八月 副島圓照 和歌山大学名誉教授)



絵：(故) 平川 経高

---

# あゆみ

真生幼稚園の子どもたち

〒840-0806 佐賀市神園2-5-15

学校法人 真生学園 真生幼稚園

TEL 0952-30-6714・30-7746

FAX 0952-34-1398

ホームページ <http://www.shinsei-youchien.com/>

メール・アドレス [shinsei-youchien@awa.bbiq.jp](mailto:shinsei-youchien@awa.bbiq.jp)

発行：2015年10月

製作：(株)サガプリンティング

☎ (0952) 34-5100